

□ レコード (CD&DVD)

浜 中 充

(『レコード芸術』編集長)

まず、2022年のクラシックCDの売上年間トップ5から(2021年11月29日～2022年11月27日集計、レコード特信出版社調べ)。

- ・1位 J.S.バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ全曲 諏訪内晶子 (ヴァイオリン) [ユニバーサルミュージック]
- ・2位 ジョン・ウィリアムズ ライヴ・イン・ベルリン [ユニバーサルミュージック]
- ・3位 ミュージック・ギフト・トゥ 村治佳織 (ギター) [ユニバーサルミュージック]
- ・4位 第18回ショパン国際ピアノ・コンクール・ライヴ 反田恭平 (ピアノ) [東京エムプラス]
- ・5位 ブルックナー：交響曲第8番 チェリビダッケ指揮 ユンヘン・フィル [東武商事]

このランキングから、いくつか2022年を象徴するポイントが見えてくる。

コロナ禍になってほどなく、世界中で演奏活動が停止したが、そのことがレコード界にもたらした影響のひとつに、多くの演奏家が無伴奏アルバムに取り組んだことがある。演奏家の時間的余裕、録音会場の余裕などで、たとえばバッハの《無伴奏ヴァイオリン・ソナタとパルティータ》を例にとっても、諏訪内晶子盤の他にも、ジェームズ・エーネス、レオニダス・カヴァコス、戸田弥生、ファビオ・ピオンディ、フランク・ペーター・ツィンマーマン (全曲ではないが) など、錚々たる顔ぶれのCDが登場している。

クラシックの象徴とも言えるレーベル、ドイツ・グラモフォンから2021年に発売された「ライヴ・イン・ウィーン」以来、すっかりクラシックの作曲家として認められたジョン・ウィリアムズへの注目も高まり続けている。2022年には、やはりドイツ・グラモフォンから「ライヴ・イン・ベルリン」として2021年10月のベルリン・フィルへの客演がCD化され、ふたたび大きな話題となった。同じくドイツ・グラモフォンから、ムターのために書かれたヴァイオリン協奏曲第2番などを収録した「ムター・プレイズ・ジョン・ウィリアムズ」、また、ソニークラシカルから、ヨーヨー・マのために書かれたチェロ協奏曲などを収録した「ギャザリング・オブ・フレンズ」がリリースされるなど、90歳の巨匠の輝きはいや増している。

2021年に行なわれた第18回ショパン国際ピアノ・コンクール関連のCDもつぎつぎと登場した。優勝者のブルース・リウの録音はいち早く2021年12月にドイツ・グラモフォンからリリースされていたが、国立フリデリック・ショパン研究所の自主レーベルから、ブルース・リウの第2弾、第2位の反田恭平、同じく第2位のアレクサンダー・ガジュヴ、第3位のマルティン・ガルシア・ガルシア、第4位小林愛実、ファイナリストのエヴァ・ゲヴォルギアンといったピアニストたちのコンクールでのライヴを収録したCDが発売された。

2022年の注目すべきCDをいくつか挙げておこう。

2017年から始まった、リコーダーの江崎浩司によるエイク：笛の楽園全曲録音「フォンテック」という一大プロジェクトが、2022年の第8巻をもって、ついに完結した。2021年12月に江崎が急逝したため、遺作となってしまったが、これこそ偉業と呼ぶべきだろう。

世界的に活躍する若手ピアニスト、藤田真央 (1998年生まれ) のソニークラシカルとのワールドワイド契約は2021年に発表され、大きな話題となったが、2022年にはその第1弾となる「モ

ーツァルト／ピアノ・ソナタ全集」がリリースされた。期待に違わぬ、初めて聴くような瑞々しい演奏が5枚のCDに刻み込まれており、今後の展開からも目が離せない。

「武満徹 映像音楽集『波の盆』」[キング]も挙げておきたい。武満徹の創作のなかでも映像のための音楽が重要な位置を占めていることはよく知られているが、そのなかでも『夢千代日記』や『波の盆』といった、なかなか評価はされないがリスナーに深く愛される作品を、尾高忠明指揮によるNHK交響楽団という、これ以上ない組み合わせが演奏している。東京芸術劇場で2日間のセッションに取り組み、高水準のCDに仕上げたのは画期的なことと言える。

生誕150年のヴォーン・ウィリアムズ、生誕200年のフランク、生誕100年のクセナキスなど、記念年の作曲家にも好企画が相次いだ。なかでもロンドンを拠点にイギリス音楽の紹介に積極的に取り組んでいるヴァイオリン奏者、小町碧の「ヴォーン・ウィリアムズ／ヴァイオリンとピアノのための作品全集」[Musikaleido]は出色の企画だった。自らも共訳を手掛けた、日本初となるヴォーン・ウィリアムズの伝記の出版、記念リサイタルを合わせて開催するなど、多角的な取り組みも高く評価すべきだ。

2022年度第60回レコード・アカデミー賞 (音楽之友社主催) の大賞3賞は、以下のような結果となった。

■大賞 声楽曲部門

J.S.バッハ：マタイ受難曲

ラファエル・ピション指揮、ピグマリオン他

[ハルモニア・ムンディ]

■大賞銀賞 オペラ部門

ドビュッシー：歌劇《ペレアスとメリザンド》全曲

フランソワ＝グザヴィエ・ロト指揮レ・シエクル、ヴァニナ・サントーニ (ソプラノ：メリザンド役)、ユリエン・ペアー (テノール：ペレアス役) 他

[ハルモニア・ムンディ]

■大賞銅賞 現代曲部門

クルターク：カフカ断章

アンナ・プロハスカ (ソプラノ)、イザベル・ファウスト (ヴァイオリン)

[ハルモニア・ムンディ]

ハルモニア・ムンディ・レーベルは、現在世界でももっとも活発な活動を展開しているレーベルのひとつであるとはいえ、3賞を独占することとなったのは、非常に異例のことである。優れたアーティストを数多く抱え、そのアーティストがいま取り組みたいレパートリーを的確に汲み取って録音芸術として提示できたことが、この結果に結びついていると考えられる。ピション (1984年生まれ) が古楽器アンサンブル&合唱団体であるピグマリオンを構成して以来の宿願だったバッハ《マタイ受難曲》、作品と同時代の楽器を用いて、そのあるべき姿に迫ってきたロト (1971年生まれ) とレ・シエクルによるドビュッシー《ペレアスとメリザンド》、音楽界最高の知性を持つふたり、ソプラノのプロハスカ (1983年生まれ) とヴァイオリンのファウスト (1972年生まれ) が取り組んだクルタークのユニークな傑作《カフカ断章》。3つの作品とともに、その作曲家の代表作とされる名曲ばかり。これらのディスクは、その名曲の演奏史を塗り替える記念碑と呼ぶにふさわしい名演を打ち立てており、時代を代表する名盤の誕生と言っていだろう。

令和4年度 (第77回) 文化庁芸術祭賞のレコード部門では、小菅優 (ピアノ) / 藤倉大: ピアノ協奏曲第3番《インパルス》他 (株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ)、藤田真央 (ピアノ) / モーツァルト: ピアノ・ソナタ全集 (株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ)、江崎浩司 (リコーダー他) / ヤコブ・ファン・エイク: 笛の楽園Vol.8 (株式会社フォンテック) の3作が優秀賞に選出された。